『地域共創学会誌』，vol.7，71–81，2021
KYUSHU SANGYO UNIVERSITY, *Journal of Collaborative Regional Development* vol.7, 71-81, 2021

【研究ノート】

創価学会団地部の研究（2）
―会員であることと地域に貢献すること―

小　池　高　史

要　約

団地の自治会で役員を務めてきた創価学会員への聞き取り調査から，創価学会の会員であることと地域貢献活動に取り組むことの関係について考察した。とくに，団地内での学会員同士のネットワークが地域貢献活動にどのように影響しているか，学会の活動と地域での活動の予定が重なるときにどう対応してきたか，創価学会の会員であったことが地域貢献活動をしてきたことにどのようにつながっていたかという点を検討した。学会の活動と地域の活動に共通点が多いことが，地域に貢献できる会員が多いことにつながっているが，メンバーの高齢化や現役世代の多忙化によって，学会員のなかでも自治会の役員の担い手が不足してきているという点もまた地域社会と共通していることであった。

Keywords：団地，創価学会，自治会

1．はじめに

公営住宅や公団住宅といった団地では，多くの創価学会の会員が自治会の役員を務めるなどの地域貢献に取り組んできた。学会員による団地での地域貢献は，ほかの地域よりも早く，1990年代以前の時期から進んでいたことも予想される（小池，2021）。

本稿では，長年にわたり団地自治会の役員を務めてきた学会員への聞き取り調査から，創価学会の会員であることと地域貢献活動に取り組むことの関係について考察する。以下に記述していくのは，調査させていただいた会員の方々がこれまでに取り組んできた地域貢献活動の実績と，団地内での学会員同士のネットワークが地域貢献活動にどのように影響しているか，学会の活動と地域での活動の予定が重なるときにどう対応してきたかということ，そして創価学会の会員であったことが地域貢献活動をしてきたことにどのようにつながっていたかということである。

2021年の3月から4月にかけて，福岡県内の団地に居住する学会員6名に聞き取り調査を実施した（表1）。調査対象者の選定および調査依頼は，創価学会九州団地部を通じて行った。対象者の選定にあたっては，長年にわたり地域に貢献してきた学会員を紹介してもらうよう依頼した。調査では，団地自治会での役員歴・活動歴，団地への入居時期と入居の経緯，団地内のほかの学会員について，創価学会への入会の経緯を共通質問項目とした。聞き取り調査は，それぞれ約1時間程度で，対象者の自宅や公民館の会議室で行った。

表1　調査対象者

	調査実施日	団地種別	調査時点年齢	性別	団地入居年
A	2021.3.13	UR（賃貸）	89	男性	1966
B	2021.3.28	県営	84	女性	1970
C	2021.3.28	市営	90	男性	1971
D	2021.4.17	県営	85	男性	1999
E	2021.4.24	市営	69	男性	1976
F	2021.4.28	UR（分譲）	67	男性	1989

2．これまでの地域貢献活動

2.1．20年間自治会長を務める（A氏）

Aさんは，1966年に現在も暮らす団地（UR・賃貸）に入居した。さきに入会した妻の勧めで自身も68年に創価学会に入会する。入居して間もないころ，団地の集会所で当時の自治会長が子どもたちに柔道を教えていることを知った。柔道の有段者だったAさんもそこに加わることになり，自治会長と知り合う。40歳のときに，柔道を一緒に教えていた自治会長が引退することになり，頼まれて次の自治会長になった。

そのときは3年間務め，転職し忙しくなることが予想されたため，次の人に引き継いでいる。半世紀前に若くして自治会長を担ったこの時は，創価学会員だということで周囲からの誹謗中傷を受けたという。

60歳での定年退職を機に，地域の要請で自治会の副会長になり，3年後からは会長となった。会社からは継続雇用を打診されたが，「定年になったら，地域貢献活動したい」と決めていた。このころには創価学会員ゆえの批判はなく，周りの人に推薦されるかたちで副会長に就いた。

その後20年間，自治会長を務めた。自治会長としては，「ふれあいサロン」という一人暮らしの高齢者の集まりを隔月で開催したり，空き巣や不審者が問題となっていた団地内のパトロールを行った。パトロールは夜の11時から1時間にわたって，ほぼ毎日休まず一人で続けた。団地住民の高齢化や独居高齢者の増加にともない，孤独死や徘徊の問題が多発するなか，一人暮らしの高齢者宅を訪問するなど住民の見守りを続けてきた。

苦労の甲斐あって，その後団地内での空き巣事件はなくなった。見回りのなかで，部屋で倒れている高齢者を発見し救助することができたり，徘徊で行方不明になった高齢者を保護したりすることができたが，それでも数件の孤独死が発生してしまったことが心残りとなっている。

さらにAさんは，団地内の活動だけでなく，町内会連合会や公団自治会協議会でも役員を務めてきた。創価学会のなかでも地域の役職を務めている。

2.2．老人会のコーラスを立ち上げる（B氏）

Bさんは，夫の病気や家族問題を抱えるなか，1962年に創価学会に入会した。その後1970年に団地（県営）に入居し，現在も暮らし続けている。団地入居のつぎの年に学会内に団地部が結成され，「地域に友好の花を咲かせよう」という教えに従い，「地域のために本当に住みよい団地にしていこう」という思いを持つ。

1974年に，当時の団地老人会の会長から老人会でコーラスのサークルをつくってもらいたいという依頼があり，ピアノの調律師で，学生時代にはオーケストラの指揮者をしていた夫とともに，団地内の集会所でコーラスの会を始めることになった。このコーラスのサークルは現在まで50年近く継続してきた。これまでの道のりには苦労も多かったが，「広宣流布のため」だと思って取り組んできた。

ほかにも子ども会の役員からはじまり，老人会の副会長や自治会の女性部長など，これまでに地域での多くの役職を務め，同時に学会内の役職も歴任してきた。この団地の自治会は，見守りが必要な住民の情報を集約した地図を作成し，見守り活動に力を入れているが，Bさんもその活動を始めた一人だった。近年では，近隣の住民と毎週集会所でダーツをしたり，指導員を呼んで健康体操の会を開いたりもしている。

この団地では，Bさんのほかにも創価学会の会員で地域活動に従事している人が多く，役員を「一生懸命続けているのは，学会員だけ」であった。それはBさんが団地に入居した70年代から同じだったが，賃貸の団地のため「家建てて引っ越してしまう」人も多く，かつての仲間の多くは今ではほとんどいなくなっている。

2.3．45年にわたり，地域の美化活動に取り組む（C氏）

Cさんは，1971年，40歳のときに団地（市営）に入居した。5年後，家族の問題で悩んでいたことをきっかけに，創価学会に入会した。

自分一人で子どもたちを育てていくことになり，近隣に自分たち家族のことを知ってもらいたいとの思いもあり，このころから毎朝団地内の掃除を行うようになった。さらには，周囲に花を植え，その世話もするようになった。こうした毎日の団地内の美化活動は，その後45年間，一人で続けてきた。

同時に聖教新聞の配達も32年継続し，団地自治会においても副会長や老人会の会長を務めてきた。「朝起きて新聞配達して，外を掃除して仕事に行くっていうのが日課で，あとは日曜は一日中，外でした。一日中，外の掃除」という日々を積み重ねてきた。

近隣住民の多くが学会員も学会員以外も含めて，掃除を続けてきた姿を知っており，現在は病気をして美化活動を休んでいるが，「酸素ボンベを付け歩行器を使って散歩に行くと必ず声を掛けてもらえる」という。

2.4．定年後に移り住んだ団地で老人会を立ち上げる（D氏）

Dさんは福岡県に生まれ，若いころは炭鉱で働いていた。炭鉱が閉山したあと，24歳のときに転職し神奈川県に移住した。神奈川でも会社の倒産や，自身の結核での療養を経験し，29歳のときに創価学会に入会した。

定年後に40年ぶりに地元に帰ってきて，現在の団地（県営）に入居した。団地には知り合いもおらず，「早く友人作りをしたいな」と思って，入居した2年後にそれまでなかった団地の老人会を立ち上げた。その当時から現在まで老人会の会長を務めている。新型コロナウイルス感染症が流行する前までは，年に一度の食事会や週一回の健康体操を開いていた。

独居の高齢者世帯が増えるなか，なるべく孤独死を出さないことを目指し，住民の見守り活動に力を入れてきた。高齢者世帯への訪問や電話でのコミュニケーションを頻繁に行いながら，毎月老人会の通信を発行し，対面で配布するようにしてきた。通信の配布は，およそ20年間欠かさず続けて，通算で200号を数えるまでになっている。とくに一人暮らしの住民には，台風がきたときなどには必ず電話し，安否確認を行っている。

老人会の会長を務めるとともに，4区に分かれている団地で副区長の立場にもあり，学会内での役職にも就いている。

2.5．20年間自治会役員を務める現自治会副会長（E氏）

Eさんは大分県で生まれ，中学校を卒業してから職人に弟子入りするために福岡県に移住した。職人の仲間から誘われて創価学会に入会し，その後学会の先輩の紹介で転職し，今も暮らす地域に引っ越してきた。結婚を機に，同じ職場の人から紹介され，1976年に現在の団地（市営）に入居した。

団地では40代のころから自治会の役員として活躍してきた。もともと自治会の活動には協力し，積極的に出て行っていたこともあって，役員に欠員が出た際に体育部長になることを依頼されて就任した。春と秋に行われる球技大会や夏祭りの運営に尽力し，団地の盆踊り大会には創価学会の音楽隊を招いたこともあった。

その後，自治会の副会長になり，現在も続けている。会長と2人3脚で，話し合いながら，団地が過ごしやすい場所になるように，日々起こる問題の解決にあたっている。長年暮らしてきた団地への思い入れは強く，この団地をモデル地区のような「みんなが問題なく，住みやすい団地にしたい」と考えてきた。

Eさんは，いまも現役で仕事を続けながら，団地自治会の役員のほか，学会や公明党の組織内でも役職を担っている。

2.6．現在，自治会長兼公民館長（F氏）

熊本県で生まれたFさんは，25歳のときに家族の勧めで創価学会に入会した。29歳のときに

福岡に移り，その6年後に現在の団地（UR・分譲）に入居した。入居した5年後に，同じ団地に暮らす創価学会の知人に頼まれて子ども会の会長に就いた。それをきっかけとして，その後継続して自治会の役員を務めてきた。現在は自治会長と公民館長を兼任している。

「嫌と言えない」性格で，「ちょっとしたはずみで，ついつい役員になってしまい，今までずるずるときてしまった」と謙遜交じりで話すが，「もうしばらく頑張ってみる」と引き受けた以上は皆に住んでよかったと思ってもらおうという気持ちでいる。

役員になった当時，団地の横にある堤防は雑草が生い茂り荒れていたが，Fさんが仕事帰りや休日に草刈りをし，整備したこともあった。団地が不良少年たちの溜まり場となり，その対応のために夜間パトロールを続けたこともあった。現在は，住民のなかに一人暮らしの高齢者が増えてきており，孤独死を防ぐための見守り活動に力を入れている。

地域での重役とともに学会の組織でも役職を務めているが，会合への出席など学会の活動は主に妻に任せ，地域への貢献に尽力してきた。

3．学会ネットワークと地域活動

Fさんが長らく自治会の役員を務めることになった最初のきっかけは，同じ団地に暮らす創価学会の知人に頼まれたことだった。また，Bさんの団地では，1970年代から創価学会の会員の人たちが自治会の活動に協力して取り組んでいた。

創価学会の会員が多く暮らす団地では，団地内での会員のネットワークがあり，自治会役員のなり手を探すのに困ったときに，学会でともに活動している知人に依頼することがある。横浜市のある市営住宅の事例では，創価学会の会員以外の人は団地内での交友関係が狭く，ネットワークを持っている創価学会の会員が他の会員に声をかけることで新しい地域の担い手を探してもらっていた。創価学会のネットワークが地域の担い手を見つける貴重な資源となっていたのである（宮部，2017）。

今回調査したそれぞれの団地では，自治会役員の確保のために学会のネットワークがどの程度利用されているのだろうか。聞き取りの結果としては，公的な組織である自治会を学会が運営している様な誤解を与えない様にという意図もあり， 予想していたほどには学会のネットワークは自治会役員の確保に利用されていなかった。

Fさんが，最初に自治会の役員になったのは，ほかの学会員からの誘いによるものだったが，Fさん自身は，会員を自治会にはあまり誘ってこなかった。実際に自治会の役員をしている学会員は，Fさんが居住する団地ではそれほど多くはないが，役員をしているしていないに関係なく協力され，自治会は，会員・会員外の垣根もなく運営されてきた。

―　Fさん自身が，団地の役とかを誰かに頼んだりとか，やってくれる人を探したりすることもあるんじゃないかなと思うんですけど，そういうときに100人の学会のネットワークで，学会の知り合いの人に頼んだりとかっていうこともありますか。

Fさん　いや。私，学会の人は一応，知っとうけん，大体，知っとうけんですね。これはもう，その辺が，なかなか人材っちゅうですかね。学会の中にも，なかなか適任者がいない。どこの組織にも適任者がいない。民生委員が4人おりますけど，3人が役員ですもんね。若い人は，もうほとんど仕事で，ちょっと無理ですけんね。なかなか，私も何人か声掛けたんですけど，知った人は，どういう仕事か知っとるけん。学会員さんも高齢者が多いです。若い人は働かないかんしですね。

この団地には100名ほど学会員が暮らしており，Fさんはそのほぼ全員を知っているが，よく知っているからこそ自治会の役員を頼みにくい。団地住民全体も高齢化しているが，そのなかで学会員の人たちも高齢化が進んでおり，自治会を担ってもらいたい若い世代の人たちは仕事で忙しくしていることを理解しているからである。

また，自治会の役員を担えるような人材は，学会組織としても貴重な存在となっており，学会組織の役を担っていることが多い。そのため，自治会役員との両立が難しいという事情もある。

Eさんの団地でも創価学会の会員で自治会の役員になっている人は多くない。Eさんも役を頼むことは少ないという。それには年齢等の適任者不足という側面以外の理由がある。

Eさん　学会の方同士の自治会，それは，私はしません。そうなったら，同じ同士やけ，いいやないかとなってくるから。全く信心してない他人だったら，そういうことはないですよね。それが，信心同士だったら，緩みがあるというか，それが出とうと思います。それはしたくないし。あえて，一般募集からやろうかなと思ってます。

学会の活動で仲良くしている会員同士で自治会を運営すると馴れ合いになってしまうのではないかという恐れから，あえて学会のネットワークを自治会役員の確保に利用しないできた。また，学会員が自治会を占拠しているとの誤解を防ぐ意図からの方針でもある。

担い手を求める団地の自治会にとって，創価学会のネットワークの存在は両義的である。近隣関係が薄くなり，自治会の役員にとっても役を頼める住民が少なくなっている状況のなかで，普段から学会の総会や座談会で関係を築いている学会のネットワークは貴重なものである。だが，その一方で創価学会の会員も高齢化しており，専業主婦も少なくなった。学会組織の役割もあるなかで，自治会の役を頼める人は少なくなっている。学会の事情や相手の事情が分かる

からこそ，学会員以外の住民よりもむしろ頼みにくくなる場合もある。また，普段から関係を築いている会員同士であることが，自治会の活動をしていくうえで馴れ合いになってはいけないと考え，あるいは学会が自治会を運営している様な誤解を与えないため，あえてほかの会員に自治会の役を依頼することを避ける場合もある。

4．学会員であることと地域貢献

4.1．予定が重なったとき

調査対象者となった6名は，いずれも自治会の役職だけでなく，創価学会の組織内の役職も務めていた。それでは，地域活動の予定と学会活動の予定が重なった場合にどう対処してきたのだろうか。今回の聞き取りのなかでは，ほとんどの人が学会の予定よりも地域の予定を選んできたと述べた。

―　先ほど，自治会長されてても，学会の活動は休まなかったっておっしゃってましたけど，予定が重なるみたいなことはなかったですか。

Aさん　たまにあったですね，やっぱ。そのときは「ごめんね，地域の会合が入っとるけ，ごめん」ちゅうてから，休みよったですけどね。そんな数はなかったですね，バッティングすることはあんまなかったですけどね。そういうときは必ず断って，ごめんねえって，おわびしよったですね。地域のほうが大事ですから，学会活動よりも地域の仕事のほうが大事です。これを第一義に考えていかんとですね，そういうことでやってきましたからね。

Aさんは自治会長だったこともあり，「学会活動より地域の仕事のほうが大事」と考え，予定が重なったときには学会のほうを休んでいた。

―　そうやって昔から地域の仕事をいろいろされてきて，一方で学会の役職とか仕事も結構されてきたと伺ったんですけど。両方，大変じゃないですか。

Bさん　地域を取らないかん。

―　日程が重なったらやっぱり地域。

Bさん　地域を取らないと。地域の長してたら，もちろん行かなきゃいけない。

―　やっぱり地域をまず優先して。

Bさん　そう。まずは優先。ずっとそんなんしてきました。

Bさんも，まずは地域を優先し，日程が重なったら地域を取らないといけないと考えてきた。地域活動のなかで長の立場にあれば，行事を欠席することはできないが，もし参加者が多くいて自分がその中の一人という立場であれば，学会の活動を選ぶこともあった。

Eさん　もし重なる場合は地域優先でいきますから，私は。地域のほうが大事ですから。地域優先でいかんと始まらないから。

Eさんも同様に，予定が重なる場合は，地域を優先している。「地域のほうが大事」と明言された。とはいえ，彼らは学会のことをおろそかにしているわけではない。地域での貢献は創価学会のなかで推奨されることであり，地域活動に尽力することが学会の教えを体現することになっているのである。Bさんが「広宣流布のために」地域活動に取り組んできたと述べたのが，そのことを表している。

4.2．創価学会から地域貢献へ

多くの創価学会の会員が，団地自治会の役員を務めるなどの地域貢献に取り組んでいることの要因としては，団地内に学会ネットワークがあることや創価学会の教えとして地域貢献を推奨していることが挙げられるが，当事者たちは創価学会の会員であったことが地域貢献活動をしてきたことに関係していると考えているのだろうか。

DさんとFさんは，創価学会に入っていなかったら地域活動もしていなかっただろうと述べた。

Dさん　人生，目的なきゃ，そんなことやらないよ。今，楽にしたいと思いますよ。私なんかもそうですよ。こうやって信心していますけど，たまにはね，楽してえなとかさ。

―　こういう仮定の話をしていいのか分からないですけど，もし，学会に入会しないで生きてきた人生だったら，地域貢献っていうか，この団地での。

Dさん　ええ，それは，そうですよ。

―　老人会，頑張ったりとか，そういうこともしていない。

Dさん　多分，していなかったでしょうね。やっぱり，そういった意味では，自分の人生が学会あることで大きく変わったなと思っています。だって，1人じゃ生きていけないっていうか，1人だけで判断して物事を処理できないですよ，どんなに頭，良過ぎても。

Dさんは，自分が創価学会に入っていなかったら，団地での地域貢献も老人会を立ち上げる

こともしていなかっただろうと考えている。学会員として学んできたなかで，人は一人では生きていけないと考えるようになり，地域での友人作りや孤独死を出さないための見守り活動をする必要を感じるようになったのである。

— 地域でかなり貢献されているというか，いろいろ今も信頼されて，貢献されているということが，創価学会に入ったことと関係があるのかなということですね。

Fさん そうです。関係ありますよ。私，いつも思うんです。今頃，悠々と遊んでされとっちゃって。

— 学会の中で，こういうこと推奨してるから，じゃあ，やるかという感じになっているという。

Fさん そうです。学会なかったら，多分，何もしよらんと思います。

Fさんも同じように，学会に入っていなかったら，地域でも何もしていなかっただろうと考えている。DさんもFさんも，楽がしたい，楽しみたいという気持ちを持つこともあるが，学会の教えにしたがって地域貢献に尽力しているのである。

一方，Eさんは別の観点から創価学会と地域活動のつながりを感じていた。

— いま，団地の中で，自治会で活躍されて頑張ってらっしゃることって，学会の教えというか，学会に入ったことが影響してると思いますか。

Eさん それはありますね。学会で学んだことは，こういう人がいいんじゃないとか，そんなんは，うまくいきますもん。学会でするようにここでもする，そうすると回ります。見よったら，一般の人は，一般なりの，段取りが悪いです。学会の場合だったら，こんなふうにするなと思って。この間もうまくいった，事故も起こらんし。訓練っちゅうとは，ものすごい大きいですよ。訓練された以上，それが頭に残りますから。そういうのでやってますよ。結局は，司会すると，司会はやっぱり訓練されるじゃないですか，学会で。それはびっくりしますもんね。なんで，そげんうまいと。

創価学会では，年間を通して会合や行事が定期的に開催される。その際，行事の運営などで会員に役割が振られ，さまざまな役割を経験することになる。就いている職業によっては，経験することがないような作業や司会の役割なども，創価学会の会員であることで若いころから経験してきている方もいる。それが自治会での仕事でも活かされているということである。団

地のなかで球技大会や盆踊りといったイベントを運営できるのも，学会での行事運営の経験があってのことなのである。それはまた，周囲に地域活動を担える人だと認められ，なかなか自治会の役から降りられないようになっていったり，さらなる地域の役職に就くことを期待されたりすることにもつながる。

創価学会の会員であることは，信仰のレベルで地域貢献への動機づけを与えられるだけでなく，学会での行事運営と自治会での活動に似たところがあり，学会の経験を地域で活かすことができるという意味でも，地域活動につながっている。

5．おわりに

本稿では，団地の自治会で役員を務めてきた創価学会の会員への聞き取り調査から，創価学会の会員であることと地域貢献活動に取り組むことの関係について検討してきた。

各地の団地で地域活動の担い手不足が課題となっているなか，担い手を求める団地の自治会にとって，団地内での創価学会ネットワークや地域貢献に積極的な学会員の存在は貴重なものとなっている。

地域での貢献は創価学会のなかで推奨されることであり，地域貢献に尽力することが学会の教えを体現することになるため，地域の役職を持った方は地域と学会の予定が重なっても地域を優先することができる。

創価学会の会員が地域活動の担い手として期待される要因の一つに，学会活動と地域活動に共通点が多いことがあげられる。組織のなかで，メンバーが持ち回りでそれぞれの役割を担う。集まって行事を開催する。高齢者の見守りをする。会議を開く。しかもそういった活動は各自の職業とはまた別のところにあるもので，それぞれの仕事のかたわらでボランティア活動として取り組む。これらの点は，創価学会の活動でも団地自治会の活動でも共通している。

そのため，学会の経験を地域で活かすことができ，地域に貢献できる会員が多いのだが，メンバーの高齢化や現役世代の多忙化によって，地域社会同様，学会員のなかでも自治会の役員の担い手が不足してきている。自治会組織をはじめこれからの地域社会のあり方を考える上で，地域と学会の両者がさらに協力関係を強め，その課題をどのように乗り越えていくかが今後の課題となるだろう。

今回の調査は，団地自治会の会長など，これまで地域でとくに活躍してきた人たちに焦点を当てたものであった。彼らの意識や経験は，団地に暮らす創価学会員の全体を代表するものとはいえない。地域でとくに活躍してきた人たち以外の会員たちの意識や地域貢献の状況はどうなっているのか。それを明らかにしていくことが，今後の研究上の課題である。

参考文献

小池高史（2021）「創価学会団地部の研究（1）：団地部の概要と団地自治会との関わり」『九州産業大学地域共創学会誌』6，47-54.

宮部　峻（2017）「地域に根ざす宗教：宗教を通じた地域活動に着目して」祐成保志，三浦倫平，清水亮，麦山亮太編『都市的居住環境とコミュニティ形成Ⅱ：大規模公営住宅における地域生活の諸相（2016年度社会調査実習報告書）』，109-118，東京大学大学院人文社会系研究科・文学部社会学研究室.